

客論

地域支援コーディネーター 福永 栄子

宮崎県に移り住み、はや10年目を迎えたが、いつまでも変わらぬ私に心をひきつけるものがある九州の山あいに暮らす人々の心の豊かさや感性、生活文化や伝統的な暮らし作法に、心からの感動を

直な反応をする村があるのかという、東京では有り得ない事実に驚いたのである。車が通り過ぎるまで笑顔で見送る中学生のいる村。その後、これは県内のあちこちで見かける風景だということを知る事になり、さらに驚いたのを感じている。

暮らし案内人がいざなう旅

感じる。東京から移ってきて、間もないころ、一番、感動したのは、西米良村の温泉近くの中学校の前を車で通り過ぎたときであった。これまで楽しみに話していた生徒たちが一斉に振り向き、帽子をとり、あいさつをした。小学生ではなく中学生たちがこんなに素



大人もすばらしい。4月、牧水の故郷・東郷を抜ける国道を走っていると、各集落でお大師さんの祭りをされているのに気がついた。

つい声をかけたら、突然、接待を受け、そのもてなしの素朴な温かさに感動した。平家祭りの日、神話街道を走っていると、水神様のところで、集落の人々から水の

接待を受けた。このように県内各地には、今、日本で忘れ去られようとしている日本人の暮らしの美しさや生活の知恵がたくさん残っている。そして、実際に旅人らに感動を与えるのは、こうした暮らしの景観ではないかと思っている。

だから、旅人を誘致するのに、あえて都会のまねごとは必要ない。地元の人との温かい交流と族などマイカーでいく個人旅行者

そ、都会にはない感動をもたらす。現在、多くの市町村で観光案内ボランティアを養成しているようだが、方法を誤るとたいへんもったいない気がする。観光名所や史跡、文化を案内されることに、

が増えている。モニターツアーを企画して調査してみると、20代後半、30代の女性の一人旅や熟年層の男性の一人旅が増えており、まさに体験交流型の旅を希求しているのが分かる。

旅人は飽き始めており、少なくとも「観光案内」を再び求めるリーダーは少ない。というのも、現代は簡単にインターネットで情報

を取り入れることもできるし、知りたことは本や新聞で入手できる時代である。むしろ旅人が自分で見つけ出したり、調べたりする「知る喜び」を残しておくべきだと思う。今「自分さがしの旅・自分磨きの旅」がブーム。実際、大型バスでいく旅行者は全体の1割に減少した現在、夫婦、友人、家族などマイカーでいく個人旅行者

光名所や郷土史、植物の名を無理やり教える「観光案内」よりも、自分の集落に愛着を持っている地域の人や、友や親せきをもてなすように道案内し、知り合いを紹介してあげる旅が、今、人気を集めている。宮崎では「ゆっ旅」。熊本では「うらごころん阿蘇高森」や「みなみあそ暮らしめぐり」等。11月に入ると、綾町の「スロな暮らしと食めぐり」、宮崎市の「まるごとブーゲン青島」、東郷の「暮らしめぐり」などが展開される。郷土を愛する、暮らし案内人がいざなう旅は、旅人が、自らの感性で、観光を押し付けられることなく感動の源をさぐる事ができる、自分探しの旅である。

ふくなが・えいこ 福岡県生まれ。上智大学外国語学部英語学科卒業。地域交流誌「みちくそ」編集長。県観光審議会委員。宮崎市。